

# 保育関係者・設計者が創出する子ども環境

## ちびっこ計画

保育所の待機児童解消は現代社会が抱える課題となっているが、自治体での交付金運用という方策だけでは、保育の未来が見えてこない。大塚謙太郎一級建築士事務所が立案する「ちびっこ計画」では、現代の子どもたちに「必要なもの、とは何かを追求し、保育関係者と設計者が協働で子どもが生き生きする環境の創出を図る。ちびっこ計画の取り組み方法や実施例の中から新たな保育所の形が見えてくる。

保育所の建設で直面する問題の一つとして、自治体の苦しい財政状況がある。市町村が総事業費基準額の4分の1を負担する安心子ども基金では、負担金に苦勞しているのが現状だ。現在の厳しい状況下で、子どもたちに豊かな環境を提供するには、しっかりとしたプラン作りが重要になってくる。

ちびっこ計画では、園舎設計に当たり建物調査と生活調査を実施し、プラン作りを行う。生活調査は、開園から閉園まで各室に張り付いて、園児や保護者、保育士の動きを綿密に観察する。保育所の生活スタイルによって園内の使い方が異なるため、思い描く園舎はそれぞれに違う。

遊戯室を例にすると、時間帯により体育館に使われたり、午睡室となったり、使用用途や人数、動線が異なるため、状況が変化することに平面図に記録していく。また、保育士とのコミュニケーションの中で日々感じている事柄を情報整理し、各室の利用特性をまとめ上げる。これらの調査に手間と時間をかけてこそ、保育士の意見が設計に反映され、理想の園に近づく。



職員ワークショップ

徹底した調査実施し  
生活スタイルを把握



田植えなどの「経験」が子どもを育む

ワークショップで  
失われた遊び場再現

保育所の子どもたちが工事に参加し、理想の園庭を作り上げた認可保育所の例がある。「子どもたちに必要なものは何か、を描き、職業や年齢の異なる参加者で構成するワークショップを開いた。

参加者が幼いころ「どこで、なにをして遊んだのか」をテーマに意見を出し合った結果、遊び場所や内容に年齢差は関係なく、大きな変化があったのは最近であることが確認された。参加者の子どものころを回想して棚田・池・水路・野草園のある庭をデザインし、現代において失われた遊び場を、子どもたちと一緒に作ることも決めた。

工事には、3～5歳の子が参加。池の掘削や土砂の運搬などの工程に携わった。完成後、池のビオトープはアオコを取ったり水を足すなどのメンテナンスに手間が掛かるため、詳しい地域住民に定期的なメンテナンスをお願いし、少しずつ技術を習得した。

池と水路でつながる棚田では、近隣の農家に毎年苗を提供してもらい、田植えや稲刈りなどの指導を受けて米作りをしている。これらの「経験」が子どもたちに豊かさを与えているようだ。

園生活と地域の調和は、保育所にとって最も大切なことである。地域住民から得た知識は、保育士から子どもたちに伝承され子ども社会に根付いていく。失われつつある「経験」の育みを地域は教えてくれる。

設計者として建築物のみをデザインするのではなく、地域と保育所のバランスを保つ役割を果たすことにより、保育士と地域住民、子どもたちが一緒に新たな保育所を築く「きっかけ」を生み出している。